

# 日本の書論に見る中国書論の受容 ―『遍照發揮性靈集』および『才葉抄』を中心に―

王 娜婷・増田 知之

## 要 旨

本稿は、平安時代の代表的書論である空海『遍照發揮性靈集』および藤原教長『才葉抄』を取り上げて、日本における中国書論の受容の実態ならびにその変遷について検討を加えたものである。尚、本稿は二〇二〇年一月に提出した、王娜婷の修士論文「奈良・平安時代における中国書法の受容について―唐代を中心に」の第三章「日本の書論に見る中国書論の受容」に基づいている。

キーワード

書論・性靈集・才葉抄

## はじめに

日本と中国との書に関する交流の歴史は極めて長い。日本における書道文化の繁栄は、奈良時代にはすでに萌芽していたと考えられる。奈良時代から平安時代前期にかけては、中国文化を積極的に取り入れた時期に相当し、社会や文化全般にわたってそのような時代の独自性が表れている。こういった状況の中で、平安時代初期に、嵯峨天皇・空海・橘逸勢ら「三筆」が登場することになる。その後、所謂「国風文化」が隆盛する中で、日本独自の「仮名書道」が誕生するとともに、小野道風・藤原佐理・藤原行成ら「三跡」が出現するに至ったのである。

それでは、中国書法を積極的に受容・吸収していった時代である奈良時代および平安時代前期において、そして日本独自の書文化が花開いた平安時代後期において、中国で誕生した書という文化が、中国とは異なる文化的状況にある日本でどのように受容され、変容していったのであろうか。受容について論じる際、これまでの先行

研究は概して、「書跡」への関心が大きく、「書論」の影響についての考察はそれに比して少ない傾向にあったといえる。しかし、書論は当時の書人の書に関する考えを如実に反映しており、したがって書の受容の全体像を把握するならば、書跡だけではなく、書論（思想方面）の受容も同様に重要であると考えられる。

そこで、本稿では、如上の問題を検討するために、当該時代に執筆された書論、すなわち奈良・平安時代の代表的書論といえる空海『遍照發揮性靈集』<sup>(1)</sup>（以下、『性靈集』と略称する）と藤原教長『才葉抄』<sup>(2)</sup>の二書を取り上げ、中国書論の受容の実態について検証を試みることにする。また、日中における書の認識・解釈の共通性や相違点を比較検討することによって、当該時代の日本の書人らが書に対していかなる考えをもっていたのか、それが中国の書論といかなる関係にあるのか、といった日中における複層的な書論の展開も明らかにしていきたい。

## 第一章 空海『遍照發揮性靈集』に見える中国書論の影響

本章では、空海『性靈集』を取り上げて、本書に見える空海の書論と中国の書論とを比較することにする。『性靈集』巻三に収められている「勅賜屏風書了即献表並詩」および巻四所収の「書劉廷芝集奉献表」の二条は、中国書論からの影響を明確に指摘することができる。ここでは、両者から計五箇所の具体的記述を抽出し、それに関連する中国書論との比較検討を通して、一体、空海がどのような中国書論を受容したのか、また空海自身が書についてどのような

考えをもっていたのかについて、以下分析を試みたい。

まず、「勅賜屏風書了即献表並詩」について、以下のように原文（部分）を掲げて考察を進めることにする。

沙門空海言。去六月二十七日、主殿助布勢海、将五彩呉綾、錦縁五尺屏風四帖到山房来。奉宣聖旨、令空海書阿卷古今詩人秀句者。忽奉天命、驚悚難喻。空海聞。物類殊形、事群分体。舟車別用、文武異才。若当其能、事則通快、用失其宜、雖勞無益。空海元耽觀牛之念、久絶返鵲之書。達夜數息、誰勞穿被。終日修心、何能墨池。人非曹喜、謬對漢主之邸。欲辭不能、強揮龍管。①古人筆論云、書者散也。非但以結裹為能。必須遊心境物、散逸懷抱、取法四時、象形万類。以此為妙矣。②是故蒼公風心、擬鳥跡而揮翰、王少意氣、想龍爪而染筆。蛇字起唐綜、虫書發秋婦。軒聖雲氣之興、務仙風非之感、垂露懸針之体、鶴頭偃波之形、麒麟鸞鳳之名、瑞草芝英之相、如是六十余体者、並皆人心感物而作也。③或曰、筆論筆經、譬如詩家之格律。詩是有調声避病之制。書亦有除病会理之道。詩人不解声病、誰編詩什。書者不明病理、何預書評。又作詩者、以学古体為妙、不以写古詩為能。書亦以擬古意为善、不以似古跡為巧。所以振古能書百家体別。蔡雍大笑、鍾繇深歎、良有以也。空海儻遇解書先生、粗聞口訣。④雖然所志道別、不曾留心。今賴聖雷之震響、拔心地之蟄字。折六書之萃楚、摘八体之英華。学軫筆於鼎能、擬超翰乎草聖。想山水而擺撥、法老少而終始。君臣風化之道、含上下画、夫婦義貞之行、藏陰陽点。客主揖讓、弟兄友悌。三才变化、四序生殺。尊卑愛敬、大小次第。隣里和

平、實区肅恭。此等深義、悉縑字字。……

それでは初めに、傍線部①について検討を加えていこう。

古人の筆論に云わく、書なる者は散なり、と。但だ結裏を以て能と為すのみに非ず、必ず須らく心を境物に遊ばせ、懷抱を散逸し、法を四時に取り、形を万類に象るべし。此を以て妙と為す。<sup>(3)</sup>

ここに言及される「筆論」とは、以下に示した後漢の蔡邕「筆論」を指している。

書者散也。欲書先散懷抱、任情恣性、然後書之。若迫於事、雖中山兔豪、不能佳也。夫書先默坐靜思、隨意所適、言不出口、氣不盈息、沈密神彩、如對至尊、則無不善矣。

このように、傍線部①は中国の代表的書論を直接引用していることがわかる。また、両者ともに、書について「自然」という審美観が強調されている。

蔡邕「筆論」に見える「散」とは、書を作るときの書人の状態を指しており、自分の感情や性情を解放する必要があるという。また、緊急に書けば、たとえ文房具がよいものであっても、よい書を作ることはできないとする。一方で、『性霊集』はこのような「筆論」の内容をふまえた上で、より詳細な論述を行っていることが注目される。『性霊集』では「散」の語に言及するに際し、書を学ぶときは、単純に結体（字形）を学ぶのではなく、必ず自然や万象から学ばなければならず、そうすることによってはじめてよい書作が可能になると述べている。このように、同じ「散」の語であって、「筆論」と『性霊集』の両者における解釈や位置づけが異なっ

ていることがわかる。すなわち、空海は蔡邕の書論を踏まえた上で、そこに独自の見解を付け加えたということができよう。

更に、傍線部①に見える「取法四時、象形万類」という表現は、唐代の書論にも散見するが、それが基づいているのは後漢・許慎『説文解字』序の思想であると思われる。ただ、空海が実際に『説文解字』を目撃したのかについては、いまだ推測の域を出ない。そこで次に、より明らかな例として傍線部②について比較していく。

是の故に蒼公の風心は、鳥跡に擬えて翰を揮い、王少の意気は、龍爪を想いて筆を染む。……是の如き六十余体なる者は、並びに皆な人心の物に感じて作るなり。<sup>(5)</sup>

ここでは、中国において文字を発明したとされる蒼頡や中国書道史を代表する王羲之について言及している。まず、文字の発明に関する記述は、以下のように、『説文解字』序に見える。

古者庖犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、視鳥獸之文与地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作易八卦、以垂憲象。及神農氏結繩為治、而統其事、庶業其繁、飾偽萌生。黄帝之史倉頡、見鳥獸蹄迹之跡、知分理之可相別異也、初造書契。

『性霊集』と『説文解字』序とを詳細に比較してみると、両者とも文字の起源について述べているが、説明しようとする内容が異なっていることがわかる。まず『説文解字』序には「初造書契」とあるように、許慎は、「書契」すなわち文字そのものについて、文字の作り方やその原理、すなわち造字法や文字の使用方法、またどのような規則を踏むかなどの諸点について論述している。その一方で、空海は、蒼頡と王羲之を例に挙げて、書作の際には自然万物

の形や運行の規則から学ぶべきであり、そのようにして書人が自然や生活から心得た感情・考え・性情によって作られたものがよい書である、ということの説明している。筆者がこのように推測する理由は、『性霊集』に「蒼公風心、擬鳥跡而揮翰」とあるように、「揮翰」という語を使っているからである。「揮翰」の語は、「揮毫」に同じく筆をふるうこと、すなわち書画をかくことを指す。また、「蒼公風心、擬鳥跡而揮翰、王少意氣、想龍爪而染筆」という対句表現からもわかるように、「揮翰」と「染筆」とが対応している。つまり、ここで空海が述べているのは、「文字の作り方」というよりも、「書の作り方」といった方がふさわしいであろう。このように、中国書論を典故として引用したとしても、その解釈や位置づけが異なっているのである。

また、先に見た傍線部①の例では、中国の代表的書論に基づき、その上でその書論の内容を更におし広げている。つまり傍線部①は、空海が中国の書論を読んだ上で、彼なりにそれらの思想をまとめ、更に自分自身の考えを付け加えた書論であるといえる。一方で、この傍線部②の例は、ただ蒼頡の名を挙げているだけで、中国の書論とは異なる自分自身の考えを述べているのである。

それでは引き続き、傍線部③について言及しよう。

或ひと曰わく、筆論・筆経は、譬えば詩家の格律の如し。詩は是れ声を調え病を避くるの制有り。書も亦た病を除き理に会うの道有り。……又た詩を作る者、古体を学ぶを以て妙と為すも、古詩を写すを以て能と為さず。書も亦た古意に擬うるを以て善と為すも、古跡に似るを以て巧と為さず。古振<sup>よ</sup>り能書百家

の体の別るる所以なり。蔡雍大いに笑ひ、鍾繇深く歎くは、良に以有るなり。<sup>⑥</sup>

空海はここで、

夫古質而今妍、数之常也。愛妍而薄質、人之情也。鍾・張方之二王、可謂古矣、豈得無妍質之殊。且二王暮年、皆勝於少。父子之間、又為今古。子敬窮其妍妙、固其宜也。然優劣既微、而会美俱深。故同為終古之独絶、百代之楷式。

という、宋の虞祿「論書表」にも見える「古今」の書についての審美観を例として、学書においてただ形のみを学ぶこと、すなわち「形似」を否定的にとらえており、その一方で古意を会得すること、すなわち「神似」の方がよいと考えていることがわかる。

最後に、傍線部④について検討を加える。

然りと雖も志す所の道別るれば、曾て心に留めず。今聖雷の震響に頼り、心地の蟄字を抜く。六書の萃楚を折り、八体の英華を摘む。転筆を鼎能に学び、超翰を草聖に擬う。山水を想いて擺撥し、老少に法りて終始す。君臣風化の道は、上下の画を含み、夫婦義貞の行は、陰陽の点に蔵む。客主揖讓し、弟兄友悌あり。三才変化し、四序生殺す。尊卑愛敬し、大小次第あり。隣里和平し、賓客肅恭す。此れ等の深義、悉く字字に緬<sup>⑦</sup>む。

ここで空海は、書の教化性について論述している。これに共通する芸術の教化性に関する記述は、以下のように、唐の張彦遠『歷代名画記』の中に見出すことができる。

夫画者成教化、助人倫、窮神變、測幽微、与六籍同功、四時並運。発於天然、非由述作。……洎乎虞作絵、絵画明焉。既就

彰施、仍深比象。於是礼楽大闡、教化由興、故能揖讓而天下治、煥乎而詞章備。……故鼎鐘刻、則識魑魅而知神奸、旂章明、則昭軌度而備國制。(卷一「叙画之源流」)

ただし、『歴代名画記』のこの記述は、書についてではなく、画の分野から分析したものである。しかし、張彦遠は「……是の時、書と画とは同体にして未だ分かれず。象制は肇めて創せられて猶略なり。以て其の意を伝うる無し、故に書有り。以て其の形を見る無し、故に画有り。」と述べるように、芸術の原点として「書画同源」の視点に立っている。したがって、本書の画に関する記述は、張彦遠の書の捉え方と多少なりとも関連していると考えられるのではないだろうか。<sup>(8)</sup>

『歴代名画記』と『性霊集』とを比較検討してみると、両者ともに、書(あるいは画)が家族や社会といった人間関係のみならず、自然とも密接に関わりがあるものだという、共通した認識をもっていることがわかる。特に『性霊集』では、「心地の蟄字を抜く」といつてから、まず空海独自の書に対する考えや学書の「秘訣」を余すことなく披瀝し、その後「此れ等の深義、悉く字字に纏む」の一節で締め括っている。すなわち、空海は個々人の道徳や良好な社会秩序、更には自然など、それらの道理が書そのもののうちにすべて含み込まれている、換言すれば、学書とは延いてはこれら諸道理を修得することでもある、と考えていたのである。また、『歴代名画記』においても、「夫れ画なる者は、教化を成し、人倫を助け、神変を窮め、幽微を測り、六籍と功を同じくし、四時と並び運る。天然に発し、述作に由るに非ず。」とあるように、画が「六籍」(儒教

の經典)と同様に社会的・国家的な教化性を有しており、それが「四時」や「天然」、すなわち自然と関係していることを明確に指摘している。

更にいえば、書の教化的機能に言及した中国の書論として、例えば唐の柳公権の「用筆在心、心正则筆正」(『旧唐書』卷一六五)という有名な記述を挙げることができる。しかし、右に見た空海の考える教化のあり方と同じではないことは明らかであろう。柳公権は、主に「心」すなわち人格と用筆との関係性について言及しており、むしろ漢・揚雄の「書心画」(『法言』)に近い。一方で空海は、前述したように、書(文字・書跡)そのものも持っている教化としての機能や効用について論述しているのである。

ところで、中国書論には、書跡における書風と内容との関連性について論述したものがあつた。唐・李嗣真の言として伝わる「右軍書楽毅論太史箴、体皆正直、有忠臣烈士之像。」(宋・沈作喆『寓簡』卷九)は、主に書跡の内容とその書の風格について論じている。書は文字を素材とした芸術であるが、その書風は詩文の内容によつても変化する。つまり、書を制作する際、その内容を伝えたいという意識が少なからず影響しており、これこそ古人が書に教化性があるとした要因のひとつであると思われる。空海はおそらくこのような点を踏まえて、書の教化性について述べたのではないだろうか。それでは次に、『性霊集』巻四に収録される「書劉廷芝集奉獻表」の一節を取り上げてみよう。

……聞之師曰、鑑者不写、写者不鑑。鑑者興来、則書遺其奇逸。写者終日、矻矻快之調句。(……之を師に聞くに曰わく、



鑑みる者は写かず、写く者は鑑みず。鑑みる者は興来れば、則ち書して其の奇逸を遺す。写く者は終日、矻矻として之を調句に快し、と。)

これは空海が入唐時に師事した人物の言として述べている箇所であるが、以下のように、伝・衛夫人「筆陣図」という中国書論の内容を直接引用していることがわかる。

近代以来、殊不師古、而縁情棄道、纔記姓名。或学不該贍、聞見又寡、致使成功不就、虚費精神。……善鑑者不写、善写者不鑑。

しかし、『性霊集』の「鑑者不写、写者不鑑」と「筆陣図」の「善鑑者不写、善写者不鑑」という両者の表現を比較してみると、後者では「善」字が副詞として使われており、更にその内容を見ると、学書における古人の書跡の重要性や鑑賞と書作との関連性などについても論述している。一方で『性霊集』は、「善」字がなく、また内容においても鑑賞と書作の違いについて言及するのみである。このように、仔細に検討を加えると、一見共通した表現であっても、すべてにおいて一致しているわけではないことがわかる。

以上、空海の『性霊集』を取り上げて、中国書論との関連性について述べてきた。ここで改めて、本章で検討した内容をまとめてみると、『性霊集』の記述の傾向、すなわち空海による中国書論の受容の有様には、以下のような二つの特徴が認められる。

一点目として、中国の書論を直接引用し、その内容について詳細な分析を加えるといった箇所はほぼ見られないことが挙げられる。ただし、例えば蔡邕「筆論」や王羲之「筆経」などの中国書論の名

称、『説文解字』序などに見られる文字の発明、また漢魏以来の中国書論の中で多く言及される事象については、それに関連する記述が散見された。

二点目は、同様の事象について検討したり、同様の書論を引用したりする場合でも、空海の書論と中国書論とは、類似し重複する部分が指摘できる一方で、仔細に分析すると、両者には厳然とした差異が認められることである。こういった部分にこそ、中国書論にはない空海独自の見解が表出しているであろうし、中国書論の受容を経た、日本書道の発展性ともいえるのではないだろうか。それゆえに、空海は日本書道史における重要な人物として位置づけられ、のちの日本書道史に大きな影響を与えたと考えられるのである。

## 第二章 『才葉抄』における『太平御覧』の影響

空海の『性霊集』から藤原教長の『才葉抄』が成書するまで、三百年以上もの長い歳月が経過しており、両者では書に関する論述にも明らかな差異が見られる。

『性霊集』は、前章で検討を加えたように、書の歴史や審美観などの記述において中国書論からの影響が垣間見える一方で、これらの議論はより全般的・抽象的なものであって、細かな点画や学書時に参照すべき手本などといった、書に関する具体的な問題には触れない。また、『性霊集』は空海の詩文を編纂したもので、専門的書論ではなく、ために書についての論述は分散的である。

その一方で『才葉抄』は、藤原教長が専門的かつ具体的に書につ

いて言及した著作であり、より集中的に書についての考えが表出している。ただし、当時における字書の形式は「口伝心授」と称されるような秘伝であって、また「流派」の形成も見られるようになっていた。このような書文化の新たな潮流の中で生まれた『才葉抄』には、前章で検討した空海独自の書論と同じように、中国書論に基づきつつも新たな展開を示した見解の痕跡が窺えるかもしれない。

そこで本章では、『才葉抄』を取り上げて、当時における書文化の変容や中国書論の受容について考察を加える予定である。尚、紙幅の都合上、主に空海『性霊集』の記述と関連する部分を例に挙げて分析していきたい。

『才葉抄』の成書は平安時代末期と考えられ、中国では宋代に相当する。そのため、『才葉抄』の中には、北宋初期に勅命を奉じて編纂され、日本にも齎された中国の代表的類書である『太平御覧』を引用した部分が見られる。その対応関係を以下に示そう。

真の物は、第一の大事なり。唐人は、まずこれを習うなり。我が朝にもしかるか。近代は、皆行の物を先に習えり。されば真に達したる人稀なり。少々文字不具なれども、能書の様として書き様有り。また、たださわさわとゆがまず、文字の座もはたらかず書きたる一の品なり。宋朝の歐陽が真は、かくのごときなり。これは少し愛を取るなり。心より愛敬のあるは難なり。すべて上古の能書も、皆満足する事は難なり。されば法性寺殿は、むかしの手書きには、道風、佐理、行成、この三人を能書と宣えり。この三人に三徳三失あるなり。道風は、強く書きて少し俗道なり。強きは徳、俗道は失なり。佐理はやさしくして

よわし。やさしきは徳、よわきは失なり。行成は、打付に愛敬ありて、手の少し正念なきなり。愛は徳、正念なきは失なり。故に太平御覧には、骨多く肉少なきは筋書、肉多く骨少なきは墨猪、力多くして筋ゆたかなるは聖なり。力なく筋なきは病なりと云々。

右の傍線部について、『太平御覧』からの引用であることが明示されている。この部分に相当する記述は、

衛夫人筆陣図曰、若初学書、先須大書、不得從小。善鑑者不写、善写者不鑑。多骨微肉者筋書、多肉微骨者墨猪。多力豊筋者聖、無力無筋者病。一一從其消息而用之。

とあるように、『太平御覧』の中（巻七四八・工芸部五・書中）に見出すことができる。また、衛夫人「筆陣図」を引用したものとして、以下のような記述も確認できる。

物を書くには、よくよく心を調じて思量すべし。荒く書く事なし。猶々存ずべき事、太平御覧には軍陣に向いて合戦なるべく思うなり云々。また云う。右軍、衛夫人筆陣の図に題して曰く「それ紙は陣なり。筆は刀稍なり。墨は鎧甲なり。水硯は城池なり。本師は將軍なり。心意は副將なり。結構は謀略なり。颯筆は吉凶なり。出入は号令なり。屈折は殺戮なり。それ書かんと欲して、まず墨を研ぎ、神を凝らして、思いを静かにし、あらかじめ字形の大小偃仰平直振動を想い、筋骨をして相連ねしめ、意筆前に在りて、然る後、字を作す云々」と。一番に知るべきなり。

先に示した例と同様に、ここでもまた、

王右軍題衛夫人筆陣図後曰、夫紙者、陣也。筆者、刀鎗也。墨者、鎗甲也。水硯者、城池也。心意者、將軍也。本領者、將副也。結構者、謀画也。颺筆者、吉凶也。出入者、号令也。屈折者、殺戮也。夫欲書者、先乾研墨、凝神靜思、預想字形大小偃仰平直振動、令筋脈相連、意在筆前、然後作字。若平直相似、狀如算子、便不是書、但得其点画耳。

とある『太平御覧』中の記述（巻七四八・工芸部五・書中）を参照・引用している。このように、『才葉抄』中の「筆陣図」に関する二条は、いずれも確かに『太平御覧』から引用されたものであったことがわかる。ただし、一条目は「故に太平御覧には……」と、『太平御覧』の書名を掲げるも、衛夫人の名や「筆陣図」の名称は記されておらず、一方で二条目には、「太平御覧には……。また云う。右軍、衛夫人筆陣の図に題して曰く……」と、『太平御覧』の書名とともに、「筆陣図」や「右軍」、すなわち王羲之の名が見える。更に、両条の『太平御覧』における引用箇所は、同一巻に、しかも相前後直接して収録されていることから、『才葉抄』の筆者である藤原教長は、これらの出典として衛夫人「筆陣図」があることを当然認識していたはずである。それでは、なぜ上記のような記述の揺れが生じたのであろうか。

第一章で検討を加えた空海『性霊集』巻四「書劉廷芝集奉献表」には、すでに述べたように、「師」（これが一体誰であるかは明確に述べられていない）の言として「筆陣図」を直接に引用したにもかかわらず、衛夫人や「筆陣図」の名は挙げられていなかった。あるいは、このような当該言説を軽々に「筆陣図」であると認めない、

空海の慎重な執筆態度が教長に影響を与えたのかもしれない。両者の関連性については無論推測の域を出るものでないが、ここでは両書の類似点のみ指摘しておきたい。

また、先に掲げた『才葉抄』の一条目では、平安時代末期において「行書先習」の傾向が見られること、またそれにより楷書に長じた人が少ないことを指摘するとともに、「三跡」の書を評価の対象としている。その後、「筆陣図」を引用して、学書の際の各方面にわたる調和や書の安定性を強調するのである。ここから、教長が楷書を最も重要視していたことが読み取れる。更にいえば、『性霊集』では書の全般的・抽象的な内容についての記述が主であったが、一方『才葉抄』は、個別の書体について論じるなど、より専門的な論述がなされていることがわかった。

それでは、次の記述を見てみよう。

手を習うには、本の筆づかい、意趣を心得ずして、ただ学びまた習いたる文字ばかりをおぼえては、習わざる字は書かれざるなり。大旨だにも得れば、自然に似る事なり。手本の意趣を心得る事は、未練の時は知り難し。先達に習うべきなり。手跡にて人の心の程は知らるなり。されば相構えて異様に書くべからず。故に本文に曰く「筆を用うるは心に在り、心正しければ則ち筆正し」となり。

右の傍線部に関係するものとして、『太平御覧』には、以下のように見える。

穆宗政僻、嘗問公權用筆何尽善、対曰、用筆在心、心正則筆正。上改容、知筆諫也。



学書の心構えについて述べた『才葉抄』の右の条には、第一章でも取り上げた「筆を用うるは心に在り、心正しければ則ち筆正し」という唐・柳公権の有名な諫言が引用されている。「本文」すなわちこの出典もまた、おそらくは『太平御覧』ではないかと考えられる（巻七四七・工芸部四・書上にある。更に、ほぼ同文が巻四五四および巻六〇五にも見える）。また、『才葉抄』では、学書の際には手本の「意趣」や「大旨」を心得なければならぬこと、また書跡によって「人の心の程」がわかることなど、あくまで「手を習う」ことに主眼を置いた上で、柳公権の諫言が引用されているのであって、明らかにそれがもつ本来的な意味合いから乖離していることがわかる。

以上、本章では『才葉抄』における中国書論の受容の実態について、ささやかな考察を試みた。本書がものされた平安時代後期には、中国書論を援用しつつ技術的側面の向上に特化した書論が生み出されていたのであり、換言すればそのような書論を必要とするほどに技量を云々する書文化が定着していたのである。

## おわりに

本稿の最後に、空海『性霊集』と藤原教長『才葉抄』とを改めて比較してみると、『性霊集』は専門的書論と見なすことは難しいが、収録された種々の上表文の中で、書に関する評論や批評が積極的になされている。それらの内容は書法のみならず、第一章で検討を加えたように、書の教化性など広汎にわたっており、書をより広く捉

えようとする姿勢が垣間見える。一方で、『才葉抄』は書についての専門的評論であるが、書の技法や学書の方法など具体的な話柄が多く、微視的に書を捉えた評論であるともいえよう。

また、本稿で仔細に分析したように、両者はともに中国書論を引用し自説を補強しているが、『性霊集』は中国書論を引用しつつも、その解釈においてはほとんどの書論と必ずしも一致せず、空海独自の見解が表出しているといえる。一方、『才葉抄』はそれに比して、中国書論と異なつた新たな解釈が付加される場合はほとんどない。

しかし、確かに『性霊集』には中国書論からの展開が認められるも、やはり中国書論からの影響は甚大であるといわざるを得ない。

また一方で、『才葉抄』に散見する通俗的な書論は、中国書論における「書訣」に相当しようが、あるいは当時の日本の書文化をある程度反映しているともいえよう。

以上まとめれば、両書そのものの書籍としての性格の相違や、両書のみで概観することの限界は当然あるとしても、日本書論の趨勢として、中国書論の影響を色濃く反映した巨視的書論から、日本書道の状況に基づきその中から生み出された微視的書論へという変遷は指摘できるであろう。

## (注)

(1) 空海（七七四～八三五）の詩や碑文などを、弟子の真済が編集したものである。八三五年（承和二）頃に成立したとされる。

(2) 藤原教長の撰。本文の首に、一一七七年（安元三年、治承元年）に教

長が高野山庵室で口伝した旨の記述がある。本文は四十八条からなり、学書の心構えや書跡の善し悪し、筆法の要点などを示している。藤原教長は、関白師実の孫、大納言忠教の子、参議正三位に昇り、能書、歌人として知られた。

- (3) 当該部分の現代語訳は下記のとおり。『精萃図説書法論』第九卷（西東書房、一九九一年）参照。また、以下の『性霊集』の現代語訳についても、すべて本書を参照した。「古人の『筆論』にいうことには「書」というものは散である」とあります。ですから書は、字形のままだけで、うまく書けたとはしません。書の表現は必ず自分の心をその対象に遊ばせ、胸中の想いを解放し、四季に運筆の法を則り、万物のさまざまな形象に文字の形勢を似せなくてはいいけません。そうであって、書のすぐれた表現とします。」

- (4) これと類似した記述は、例えば唐・虞世南「筆髓論」の中にも見出すことができる。

- (5) 当該部分の現代語訳は下記のとおり。「そういうわけで、黄帝の史官の蒼頡の風流心は、鳥の足跡にまねて筆を揮い、東晋の王少の意気は、竜の爪の形を想いえがいて筆を染めました。……このような名前をもつ六十余の書体は、どれもみな人の心がさまざまな物事に触れて動いたために作ったものであります。」

- (6) 当該部分の現代語訳は下記のとおり。「ある人がいうには、「蔡邕の『筆論』や王羲之の『筆経』などの書論は、たとえば詩を作る人にとって大切な原理である格調と音律のようなものだ」ということです。詩には、音律を調和させ、詩病を避けるための制があります。書にもまた同じように、書病を除き筆理に会うための道があります。……さらにまた、詩を作る人は、古い詩体の真意を学ぶことをすぐれたこととと考えていますが、古い詩をそのまま真似することをすぐれたこととさえしません。書もまた詩と同様に、古人の書の意にならうことをすぐれたことと考えますが、古人の書の跡にただ似ていることで、それを上手であるとは考えません。古来からの能書家たちの多くが、みなそれぞれその書きぶりが異なっている理由です。後漢の蔡邕が大いに笑い、魏の鍾繇が深く嘆いたことは、ほんとうにもっともなことなので

す。」

- (7) 当該部分の現代語訳は下記のとおり。「しかしながらわたくしの志す道は、仏の道であって書の道とは別なので、まったく心に留めませんでした。ところが今、聖上の雷のようににわかになわたくし下さったお言葉によって、心の中にひそんでいた書法の秘訣が呼びさまされました。わたくしは六書のすぐれたものを折りとり、八体のすぐれたものを摘みとって自分のものにしました。また自在な筆の運びを鼎能の王羲之の書に学び、すぐれた筆の動きを草聖の張芝の書にまねています。山水の自然に心を寄せて性情を一時解放し、老少に則って始めから終わりまで書きます。書の点画の形勢には、君臣風化の道を、字の上の画と下の画の關係に含み、夫婦義貞の行ないを、陰点と陽点の關係に藏しています。また点画間の照応調和のさまには、主人と賓客とがたがいによりずり合い、兄弟が仲良く通じ合うような様子があります。また書には、三才が変化して万物を造り出し運行し、四序が万物を生んだり殺したりする、そういう天地自然の道理が備わっています。また字の結構の仕方には、身分の尊い者と卑しい者とがたがいに敬ったり愛んだりするような、大きいものと小さいものとの間に長幼の秩序があるような法則があります。また字の行間の章法には、となり村同士が仲良く平和なような、世の中全体がつつまうやうやく泰平な様子であるような調和があります。これらの深い道義が、すべて一字一字の中に包みこまれています。」

- (8) 張彦遠はまた、漢から唐の歴代書論を収録した『法書要録』（九世紀成書）を編纂している。

- (9) 当該部分の現代語訳は下記のとおり。「わたくしが唐土で書道の師に聞いたところによると、「よく書の意を見分けることのできる者は、書の形をまねて書かず、書の形をうまくまねて書くことのできる者は、書の意を見分けられない。書の意を理解する者は、感興が湧いてきたときにはじめて書いて、不思議なほどに自由に優れた表現をのこす。書の形をまねるのがうまい者は、一日じゅういつもせつせつとめて、字の形をきれいにとのえて書くことに気持をよるこばす」といっていました。」